

漢法苞徳塾資料	No. 251
区分	疾病論・病因
タイトル	病因論
著者	八木素萌
作成日	1991.06.16 臨床科

- 【1】臓腑の五行と病因の五行には、五行の同類性によって共震し共鳴するものであるから、生理的病理的反応の五行表現は、たとえば、「木」と「水」とか・「金」と「火」とか・「土」と「金」とか・「火」と「土」とか等のように複合的に現象するとか、単一的な表現を見せる、などの場合を考察すれば、複合的に表現されている場合には、どちらかが病臓であれば今一つは病因を示している。

「内傷病」の問題で重要なものは、神経・精神的に発症する場合には「瘀」の関与が大きいと言うのは、『金匱要略』の示唆以来次第に確立されてきた認識である。故に「瘀」の形成の仕組みが具体的な臨床側面において認識される事と、それが病的に蠢動する状況に対する具体的な臨床的理解がなされる事、これらが必要である。神経内科的な問題と精神科（脳神経科）として発症する場合の他にも、「内傷病」由来の疾病をまでも視野においた検討課題がある。七情（喜怒思憂悲恐驚）のアンバランスな発露や過剰な状態が、経脈の機能を種々の様相で変調させるので発病に至っているのが「内傷病」であると認識されてきたのである。「気」を「逆上・下陥・耗散・停滞・鬱結・閉塞・沈潜などなど」させるので、臓腑経脈の機能の不全が起きるに至ったのである。『温病学』の完成によって、「七情」のよる「経気」に変調は「気血津液榮衛」に変調や変容をもたらすが、それは「痰」「飲」「瘀」「火」などの「病理的・生理的」産生物となるものである、その「病理・生理的」産生物が「経気」の正常な疎通状況を妨害する（経を塞ぐ）ことが発症させるのだと、論理が具体化されるようになった。この「病理・生理的」産生物を病的に蠢動させる契機が問題である。その契機となるものは、健常人には病因としての意味を現す程度では無い程度の「外因」の作用である。

七情の喜怒思憂悲愁驚も五行に次ぎのように「喜=火・怒=木・思憂=土・悲=金・恐驚=水」に分類されている。「内傷病」発症の構造に関する上記のような論が成立した事によって、治療論も飛躍的に前進した、七情の五行分類は五臓論的な対応を、七情がアンバランスに現象する時に引き起こす気の変容の様相に関する把握—上逆・下陥・耗散・閉塞・耗散・鬱結など—は「気血」の変動様相に対する対応を、「痰」「陰」「瘀」「火」の問題にはそれらへの対応論があり、「生理・病理的」産生物の発症契機には「外因」要素の関与があるとの論によって発症契機を具体的に把握えられるのでこの側面にも対応できる。

- 【2】外感病は、病因の五行性は、同じ五行的な性質の臓腑経絡と共震する現象（バイブレーションの波長が合うように）を見せる、故に、病臓腑の病証と病因の五行の病証とが並行して現われる。

この法則性が病因の診別を可能にする。しかし、この問題には更に、外感病は皮毛腠理から次第に内に入って行くものであるから、この表から次第に裏へ侵襲して行くという構造に關与するものが、病証的にも介在することになる。それが、つまり、三陰三陽（太陽・陽明・少陽・太陰・少陰・厥陰）である。「經」病からその經の「腑」病へ伝變の伝經現象、「經」から他の「經」への伝變（同名經相互間のもの、隣接關係に伝わるものが主）する伝經の現象、複数經が相い前後して病むものである合病と言われる現象、複数經が並列的に病むと言う并病の現象、經病段階を飛び越してイキナリ臟に病邪が入る直中の現象など、これらの「伝病論」の生理と病理に關して『傷寒論』『金匱要略』の達成の上に立つ「傷寒学派」の理論構成が在る。

『素問』熱論第 31 が外感病の中では「傷寒」が体にとって最も厳しい邪であることを記述しつつ、三陰三陽論を展開しているが、『傷寒論』はこの論を忠実に承継いだ上に、この三陰三陽の病証論をさらに敷衍し詳しくしたものである。元代の『鍼灸四書』には、「傷寒学派」の三陰三陽の論を「太陽」は「太陽經」と把え「陽明」は「陽明經」と見て、鍼灸治療を組み立てた記述が見られる。このような態度は実は『傷寒類証活人書』（朱肱）の記述にも見えるように、湯液家によって既に医者の世界に常識化していたのである。

病邪は先ず皮毛腠理の分から犯すという事には、「衛・氣・榮・血」という体成分の区分で見れば、「衛」分から犯すので衛氣が「体表」で邪氣に抵抗するという段階から、病証が始まると言うことである。「衛」分または「衛氣」の分野は「皮毛腠理の分」である、また「表」である、また「陽の分」である、また「脈の分」（經脈の流注上の枢要な部分）でもある。五臟では「肺の分」であるが、また、經脈体制においては体表を最も広く分布している經脈、つまりは「太陽經」の「分」である。

このような構造から、外感病の病証には、初期段階にあつては臟（肺）の病証、病邪の五行性に應ずる病証、經脈に流注と經脈の性質に關連する（太陽病）病証、という三側面があるのが把握され理解されるのである。

【3】外邪に性質の生理病理への影響の問題が、外感病の診察と治療と研究上において重要な意味を持っている。

- a) 『風』は五行においては『木』である、『木』の性質は、陽の始発であり、若芽が成長して行く有り様のように、しなやかであり伸びやかであるが、まだ不安定で脆さがあり、動き回り賑やかでもある。陽の上昇性・風の浮動性・風の変化し易さ・等などが、木の「臟」の主る各種の生理的機能の変調として表現される。
- b) 『暑・熱』は五行では『火』である、炎上性・灼熱の作用・強い陽性が、煩躁・譫言妄語・熱などの病証を現わす。
- c) 『湿』と難經の言う『勞』『食』は五行では『土』である、「湿」は「沈濁」性を持っており、「籠りやすい傾向があり、「熱化」するものと「寒化」するものと言われている。『難經』の「勞」「食」の邪を「土」に配する説は、「勞」は「氣虚」を為して『脾・胃』

に負担を掛けるという認識と関連していよう。

- d) 『燥』と難経の言う「傷寒」は五行では『金』である、『難経』が「傷寒」を「金」に配当しているのは、「十五難」の記述と「五十八難」および「七十四難」「七十難」などの記述が軸になっていると思われるが、それが「肺」を傷害する「邪」として「秋気」であると見ているのであるから、「秋気」を『燥』と表現するか『傷寒』と表現するかの問題のみである。「五十八難」が『傷寒有五』として「中風」「傷寒」「湿温」「熱病」「温病」に分類している。これは『素問』熱論第31の記述を横ににらみながらの議論であることは歴然としている。「収斂性」「涼燥性」の邪であり陰性の邪である。
- e) 『寒冷』と難経の言う「湿」は五行では『水』である、「傷寒」「燥」が上から冷えて体に侵襲する「邪」であるのに対して、この「水」性の邪は冷えが下から体を侵襲する「邪」であり、「金」性の「邪」が「燥」性が基本になっているのに対して、「水」性の「邪」は「冷涼」な「寒邪」である、凍結・氷湿性を兼ね備えている「寒邪」なのである。「六因の邪」の中では最も「陰性」が強いものである。「凝結・氷結・凝縮性」「閉塞性」「沈潜性」を持っており、『傷寒論』に「最も殺瘡の気なり」と表現されている。
- f) 「春・夏・秋・冬」の四季の「気」を「成・長・収・蔵」として把握し認識している。「長夏」の「気」を言う時には「化」とする。「春＝生」「夏＝長」「長夏＝化」「秋＝収」「冬＝蔵」という訳である。「外因」の「五行」もこの性質を持っている。

【4】不内外因には、虫獣などの咬刺傷・各種の熱傷や凍傷・刀槍銃などの刺切創・打撲、骨折、捻挫、脱臼、擦過傷など・中毒や毒物燕下の類・房室傷、等などが挙げられている。傷津、耗精、失血、傷血などと、傷害創が『経脈』の「気血の疎通」を塞ぎ或は妨げたり、臓腑そのものを障害する点で、重要な病因としての意味が在ると認識されている。

【5】『金匱要略』臓腑経絡先後病脈証第一に「夫レ人稟ノ五常ハ。風気ニ因ツテ成長ス。風気は能ク万物ヲ生ズト雖ドモ。亦能ク万物ヲ害ナウ。水ノ能ク舟ヲ浮カブルモ。亦能ク舟ヲ覆ガエスガ如シ……」と記述している。またこの文の後には「……千般ノ災難ハ三条ヲ越エズ。一者ハ(一ツニハ)。経絡受邪シ、臓腑ニ入り内ノ因ル所ト為スナリ、二者ハ(二ツニハ)、四肢九陰竅ヨリ、血脉相イエ伝エテ壅塞シテ通ゼズ、外ノ皮膚ニ中タル所ト為スナリ、三者ハ(三ツニハ)、房室金刀、虫獣ノ傷ブル所、以テ凡テ之レヲ詳ラカニスレバ、病ノ因ルモノ都ナ尽クサル……」と記述している。

病因と言うものは、1－内因、2－外因、3－不内外の何れかに該当しているものであるという訳である。